6つの系を中心に科目を選択

多摩大学の新カリキュラム　特別コースで意欲ある層を育成

多摩大学（寺島実郎学長、経営情報学部、グローバルスタディーズ学部）の経営情報学部は、2023年度から新たなカリキュラムでスタートした。中でも、意欲のある学生が選択する2つの特別コースは白眉である。この特徴を4つに絞って、小林英夫経営情報学部長、小西英行経営情報学部教務委員長に聞いた。

小林学部長・小西委員長に聞く

○6つの「系」

同大学は「ゼミの多摩大学」としてのブランドを確立し、昨今はアクティブラーニングに注力をしている。一方で課題もあった、と小西教務委員長は話す。

「これまで、情報技術に重きを置く経営情報学科とビジネス能力重視の事業構想学科を持つ経営情報学部では、学生は所属学科によらずどちらの学科の科目でも自由に取れる状態でした。つまり、学科のディプロマポリシーとその学位プログラムが明確ではなかったのです。学生からすると、学びたい科目ではなく、時間都合の良い科目を取得するようにもなっていました。よく言えば自由、悪く言えば学修が体系化されていなかったのです」。

そこで2023年度から抜本的に教育の4つの改革を打ち出し、新カリキュラムをスタートした。

1つが、両学科を改めて特色づけ、学びの体系を整えたことである。これまでは、各学科で卒業要件が、必修が26単位、選択が60単位であった。このたびの新しいカリキュラムでは必修が21単位、選択が22単位と選択科目を削減した。ゼミも各学科の専門に合わせて教員を配置し、プレゼミでは各学科や後述の「系」の理解を深める進路指導が行われる。

2つが、各学科にそれぞれ3つずつ新設された「系」である。卒業要件では、選択必修が36単位から79単位となったが、その理由がこの系である。

「両学科に6つの「系」を置きました。経営情報学科では「情報デザイン」「（データ）分析」「開発（プログラミング）」、事業構想学科では「アジアユーラシア」「地域」「経営」です。この系を構想したのち、それぞれの系に関係する教員を配置し、彼らに履修に必要な科目について議論してもらいました。教員が教える科目ではなく、系に必要な科目を演繹して置いたのです」と小西教務委員長。

各系は必要な科目群で構成されており、全て履修しGPAの基準を満たすと卒業時に履修証明が発行される。各学科の学生は、基本的には自学科の系を1つは履修するが、別学科の系も履修はできる。もちろん、自学科の系取得が優先されるので、2年次の学科振り分け時は必然的に関心のある学科に進むことになる。

「系を修めない、つまみ食い的な科目選択も可能ではあります。しかし各系に関係する科目の開講時間をずらし、なるべくゼミの進路指導では系の履修を促します」。

卒業論文はまだ必修にはしていないが、特別コースを選択した学生を中心に卒論を書く雰囲気が醸成できればと小西教務委員長は語る。

○2つの特別コース

3つが、習熟度別の2つの組分けである。

年々、学生の学力の幅が大きくなっているため、特に1年次の必修科目である「プレゼミⅠ・Ⅱ」、「スタディースキル入門」、「ビジネススキル基礎」は、入学式翌日のオリエンテーション時に試験を課してクラス分けを行い、習熟度に合わせて教え方を変えているという。

小林学部長（右）と小西委員長

最後に、各学科の「ジョブ型人材育成コース」である。

「これまで、学力上位層の学びを支援する仕組みがありませんでした。そこで、経営情報学科に「先端的マーケティング心理コース」、事業構想学科に「実践的ビジネスエンジニアリングコース」を新設し、彼らの熱意の受け皿としました。いわば、特別コースで、各コース5人の教員が、20人の学生のみに特別育成コースを施すのです」と小林学部長は力を込める。

特別コースは、1年次にプロジェクト型の科目である「プレコース」を選択履修した学生から選抜される。2～4年次と、他の科目とともに特別コースの選択科目を取得する。学生たちはかなり負荷の高い課題をこなしながら力をつける。

「4年次には慶應ビジネススクールでも採用しているビジネスゲームや事業計画書の作成などを取り入れ、より実践的なビジネススキル取得を目指します」。

小林学部長はさらに次のように語る。

「選抜基準はやる気や熱意を重視しています。本学は「志」の大学として、プレコースのプロジェクトでの熱意や役割など受講態度を見ます。彼らの熱意が学内に広がり、全学的な学力や熱意の底上げに繋がることを期待します。将来的には大手企業もですが、起業を目指す学生が現れてくれればと思います」。

○自由度を尊重しつつ体系化

この新カリキュラムの優れた点は、多様化する学生の自由度を尊重しつつも、大学側の学修の体系化をしっかりと構築している点である。新しい系や特別コースから、大学側の教育の意図を明確に示す。

「これからの予測不可能な時代では、1つの専門をより深めていく学びよりも、浅くてもいくつかの専門を掛け合わせる学びが重宝されます。だから系は2、3を選択し、それらをしっかりと学び、できれば特別コースも取って、自分で掛け合わせる。そうすると、より個性のある学びに繋げることができるのです」。

成績や学生の取り組みデータは、全てIR推進室に集約され、次の教育改善に結び付けてPDCAサイクルを回す。

これだけ多様な学びに対して、どのようにディプロマポリシーを定めているのか。DPには、「多摩のローカリティを究めることにより、グローバルに目を開く〝グローカリティ〟という思想を持つ、多摩地域の活性化をリードするグローバル人材＝多摩グローカル人材を育成する」とあり、確かに多様な学びを包括していると言える。

小西教務委員長は次のように話す。

「カリキュラムの検討に際しては、様々な大学の事例を研究しました。印象的だったのは総合型選抜が広がっていること。やはり偏差値序列による大学の在り方は古いのではないでしょうか。受験生たちには、どのような大学でどのような教育が行われているか。それが自分に合うか合わないかで大学選びをしていただきたい。本学は学力に自信がなくても、ビジネスに関心があり、チームで学びあうスタイルが好きな学生にはぴったりだと思います」。

特別コースを担当する教員は、通常授業に加えて、さらに授業を持つことになる。多忙にはなるが「熱心な学生たちと議論するのが楽しい」と口を揃えるという。今後の多摩大学の教育に注目したい。

[redacted]